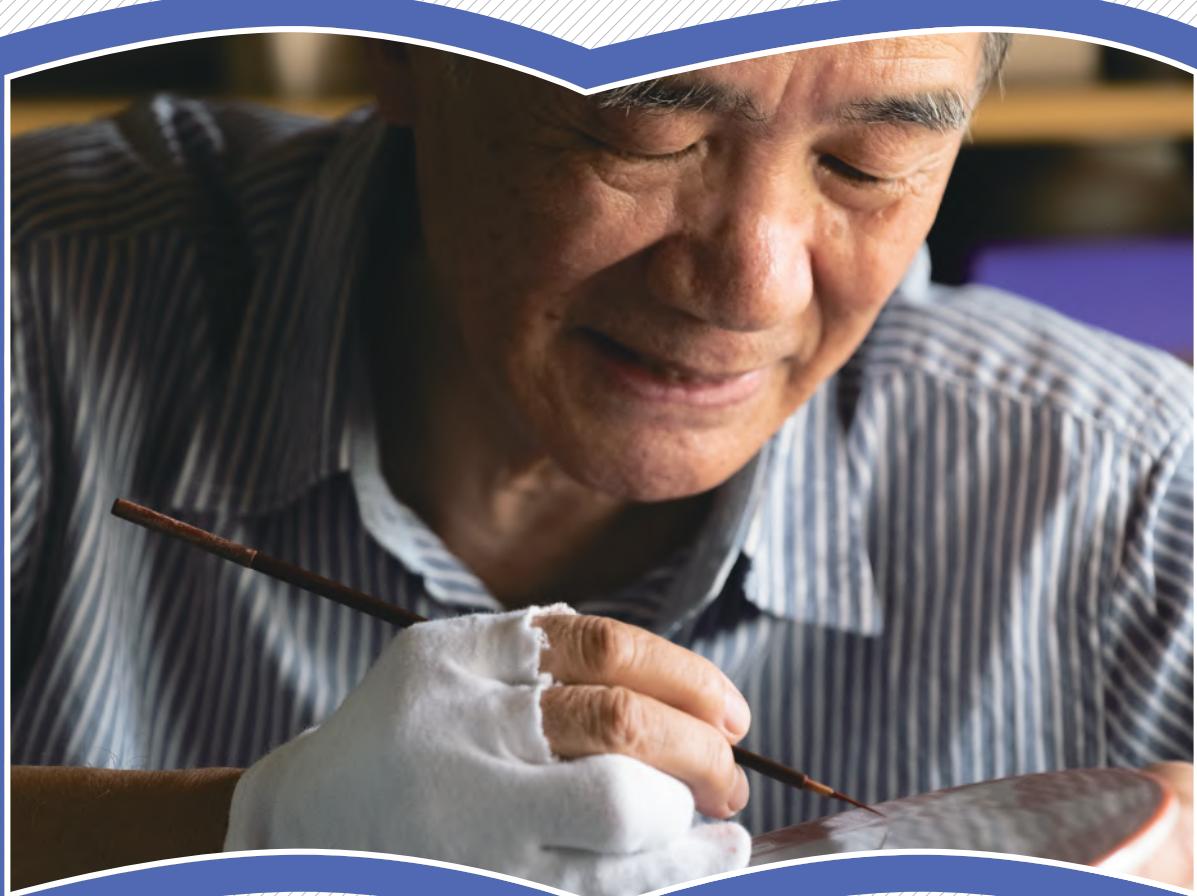


秋元雄史がゆく、九谷焼の物語



第八話

“産地”として、
底上げしていく。

第七話から続く作家工房探訪。

今回は、赤い線のみで描く”赤絵細描”的第一人者・福島武山さんに、

作品のこと、産地のこと伺いました。

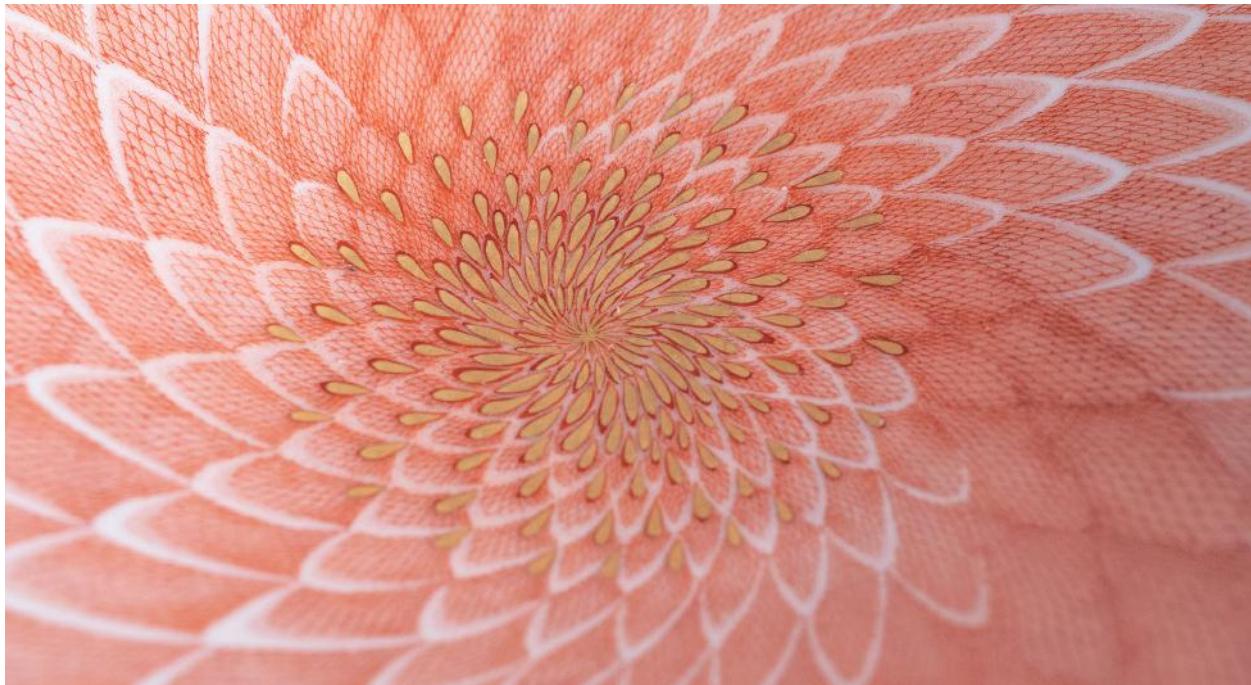
「LIBRARY 秋元雄史がゆく、九谷焼の物語」とは

2020.10.24～12.20まで開催された「産地のオンラインミュージアム KUTANism」の主要コンテンツの1つ。陶石から絵付け、そして料亭まで。九谷焼はいかにして生まれ、使われてきたのか。KUTANism全体監修・秋元雄史が、自らその現場に足を運び対話する中で、九谷焼の物語を再発見していく連載シリーズです。

Starting out as raw pottery stone, they are painted, and eventually served at traditional ryotei restaurants. Just how exactly did such Kutani ceramics come to be, and come to be used? Through this mini-series, rediscover the origins and evolution of Kutani ceramics, with KUTANism supervisor Akimoto Yuji as your on-site guide.

\ WEB版はこちら /





第八話

“産地”として、底上げしていく。

九谷焼における“作家性”的多様な在り方を探るため、今日活躍する九谷作家を訪ねる第七・八話。古九谷にインスピアイされ、その一点のみ見つめ続けて制作に邁進する武腰潤さんにお話をうかがった第七話に続き、第八話では赤絵において“一門”を築く、福島武山さんを訪ねます。

針の先のように細い、無数の線によって織りなされる赤絵細描の世界。九谷焼の絵付けの中でも独自の発展を遂げてきた赤絵に魅了され、会社員を辞め職人の世界に入った福島さん。ご自身の制作活動の傍ら、ワークとして後継者育成にも尽力されています。福島さんにとっての“職人観”そして“産地への想い”などをうかがいました。



案内してくれた人

福島 武山さん

九谷焼における赤絵細描の第一人者。結婚して赤絵の盛んな地域・能美市佐野町に移り住んだことを機に、会社員を辞めて26歳で絵付け職人の道へ入る。展覧会で活躍する傍で、自身の門下生はじめ九谷焼技術研修所で講師を務めるなど、次世代の育成に積極的に取り組む。



福島武山さんの作品を拝見しながら。

赤絵の地・佐野での出会い

秋元：凄まじいですね…！僕の老眼ではもはや掴みきれない世界観です。

それにしても、昔は風景や人物といった図柄が中心で、こういった幾何学的な文様って、いわば“付属的”な存在でしたよね。

その付属部分がこうして拡大展開していったのはどうしてなんでしょう。

福島：モダンなものを求める時代のニーズもあるでしょうが、反対に言うと、今人物や風景を描ける人がいないんですよ。そういう“絵”は批評されますから(笑)。

だから模様をやっているというのは、一つ理由としてあるかもしれません。

秋元：なるほど。絵となると「上手い／下手」という評価が生まれますからね。

福島：昔の九谷焼の絵は本当に上手いです。武腰潤さんのお祖父さん・武腰泰山さんの絵などを見ると驚きますよ、もうあまりに凄くて。

秋元：どうして昔の職人さんはそんなに絵が上手かったのでしょうか。

やはり“数”をこなしていたからでしょうか？

福島：どうでしょう。さすがに最初から上手くは描けないでしょうから、数なのかもしれませんね。



福島さんのご自宅にて。

秋元：改めまして、本日は福島さんのこれまでの来し方とお仕事について振り返っていただく中で、「赤絵」というものも透けて見えたと考えています。まず、福島さんと赤絵との出会いからうかがえますか。

福島：私はここ（石川県能美市佐野町）に赤絵の神社（※）があることも知らずに、結婚を機に家内の実家がある佐野にやってきました。

サザエさんでいうところのマスオさんですね。そしてここで初めて「赤絵」と出会うんです。

（※）赤絵の神社…「陶祖神社」。赤絵細描技法を発展させた能美市佐野出身の斎田道開が祀られている。

秋元：そうでしたか。奥様のご実家が赤絵をされていたんですか？

福島：というか、この辺りの人は皆、絵付屋さんに働きにいっていました。

妻の母が通っていた窯元のご主人が、特に赤絵をお好きでしてね。

「あんちゃん、県工（※）行つったんなら絵かけるか？」と、私に素地の茶碗を与えてくれたのが赤絵を始めた最初のきっかけです。

（※）県工…「石川県立工業学校」の略。工芸やデザインを学べる学科がある。





秋元：それはおいくつのときですか？

福島：昭和46年で、24歳です。職人を始める年齢としては遅いですよね。

当時は印刷会社で会社員として働いており、休日だけ絵付けを手伝っていたのですが、26歳のときに「会社を辞めて職人になる」と家族に言いました。

そしたら、家中大反対で。当時は問屋さんが強くて、職人の地位が低かったものですから、「ネクタイ締めて会社に行けているのだから、サラリーマンを続けた方が絶対に良い」と。

宴席で職人が背広を着ているだけで「職人風情が背広を着るな」と叱られたような時代でしたから。

秋元：その反対を押し切ってまで職人の道を選ばれたのは？

福島：こういう細かい仕事が、自分は好きだったんでしょうね。

あとは高校を卒業して8年間会社勤めをする中で、後の姿というものが見えてくる。

それに嫌気がさしたものもあったと思います。

そんなときに赤絵に出会って、「自分を生かせる仕事だ」と直感したといいますか。

当時はものすごく忙しかったですよ。

うちの義母なんて月に2回だけ休みで、それも半日です。

秋元：それだけ物が売れた時代だということですね。

主にどんな物をつくっていたんですか？

福島：お茶碗ですか、公民館で使われるような茶器や徳利といった、わりと日常使いのものが多かったです。

当時は印判が主流でした。

転写シールができたのはもっと後ですね。

佐野は“赤絵の地”と言っても産業九谷の方でしたから、筆で赤絵を手描きしているのなんて、当時私とあともう一・二名くらいでしたね。

秋元：そうなんですね。手書きの赤絵は人気がなかったんでしょうか。



福島：時代に合わなかったのでしょうか。当時は経済成長が右肩上がりで、とにかく“物を買いたい”という時代。九谷焼は物凄く売れてました。私は量産の方ではなかったので、その恩恵には全くあやかっていませんが。私のやっている赤絵は何せ時間がかかるもので。

秋元：福島さんは当初から、こういった細密な赤絵を描かれていたのですよね。なぜあえて時代に逆らうようなことを？

福島：細かい作業が好きだったのもありますが、「九谷茶碗まつり(※)」に列ぶような名品を眺めては「いつか、こんな仕事ができるようになりたい」という憧れの気持ちがあったこともあります。食べる分には義母と家内が稼いでくれてきていたので、やかましく「生活の足しになるような仕事をしろ」とは言われなかつたのも今思うとありがたかったなあと。



「職人仕事」と、「作品制作」の狭間で

秋元：福島さんの赤絵は独学ですか？それともどこか工房で修行をされていた時期があったのでしょうか？

福島：いわゆる“修行”はしていません。もういきなり実践というか。

今思えば、注文仕事が忙しかったですから、とにかく描いて描いて、そこで絵の練習ができたことが良かったのかなと。

あとは名品の模写をすること。私には師匠がないので、九谷庄三など名工の作品を写すことが一番勉強になったと思いますね。



福島さんの作業場。周辺にはお弟子さんの机が並ぶ。

福島：あと、九谷には夜間の訓練学校がありましてね、そこで職人さんが技術を教えてくれる、塾のようなものが開かれていたんです。

会社勤めをしていたとき、退勤後にそこに通って、運筆の練習を2年間させてもらっていました。

秋元：その授業はどういう人向けのものだったんですか？プロというか、職業として絵付けをする人に向けてでしょうか？

福島：そうですね。

秋元：それだけ九谷焼が、町をあげての産業になっていたということですね。

福島：振り返って思うと、当時のあの忙しい時期に、授業のために時間を割いてくれていた先生方は、ものすごく気持ちのある方達だったと思います。皆夜なべ仕事をしている中で、夜の2時間は大変貴重だったはずです。だからこそ、自分も今若い人たちに教えていこうという気持ちがあります。

秋元：九谷の産地には、“後継を育てようという想い”が根底にあるような気がしますね。

ちなみに高度経済成長期の真っ只中というと、昭和40年代後半くらいですよね。

地方から若い人が東京に働きに出ていた時期だと思うんですが、九谷ではそういうことはなかったのですか？

福島：佐野には約500軒の家がありまして、その中で絵付けの仕事をしている人は120人くらいいました。かなりの割合ですよね。産業規模とすると大きかったと思います。



秋元:なるほど、それだけ仕事があればわざわざ都会に行かなくても良いですもんね。ところで、福島さんが赤絵作家として展覧会に出し始めたのはいつ頃からですか？

福島:昔日展はものすごく難しくて、通る人がなかなかいなかったんですよ。それに反発した方々が「創造美術会陶芸部」という会を、約50年前につくったんです。私を含め、そこに出品する人は多かったです。当時立派な先生がたくさんそこにおられて、デザインなどご指導いただきました。あと、伝統工芸展も入選するのも私は割合早かったんですよ。36歳くらい。「赤絵は誰もおらんから福島は有利だ」とか言われましたけど(笑)。



秋元:では職人として商品をつくる仕事を続けながらも、“作品”をつくっていく力は、展覧会を通して知り合った先輩たちから学ばれたということですね。

福島:はい。叱られることも多かったですが、大変大きな存在でした。

秋元：そんな風に展覧会に出される中で、苦労や挫折を感じられたことはなかったのでしょうか？

福島：やはり日々の仕事の忙しさの中で、“作品”をつくる時間がとれないというのが一番辛かったですね。

ただ、「一回出したら、出し続ける」と自分の中で決めていたので、ひたすら意地で出し続けていました。

秋元：はじめだなあ（笑）。

福島：でも不思議なもので、行き詰まって半ばヤケで出したものが賞を取って、意欲いっぱい取り組んだ作品が落選したりするんですよ。

今思えば、きっと作品に“欲がない”ということが良かったんでしょうね。

自分の持っているものが、素直にされている。審査する先生はやはり凄い方々ですから、どういう生活をしているだとか、どういう心理状態だとか、全部読まれている。

徳田八十吉先生なんて「お前、次のデパートの個展でこれを売ろうと思ってつくっただろう」って、もう何もかもお見通しで（笑）。



秋元：さすがですね。徳田八十吉さんから影響を受けられたことは何かありますか？

福島：賞か何かいただいたお礼にいったとき、徳田先生は羊羹でウイスキーを飲んでおられてね。

「福島、色紙をやる」といって下さったものに「遊」と筆で書いてある。「福島には遊びが足りない」と。

ご覧の通り、私の器は神経質なまでにびっしり描き詰めてあるでしょう。

だからもっと余白というか、そういうものがあってもいいのかなと。

秋元：今のお仕事の配分はどのような？問屋を通してのお仕事もありますか？

福島：最近は問屋さんもどんどん大変になってきたので、職人の方は仕方がないから自分で白磁を買って絵付けして、個展を開いて自分で売り先を見つけたりしていますけれど。

とはいって、問屋さんからのお仕事もありますよ。ただ昔と大きく違うのは、自分で値段をつけられる、ということ。昔は「一個15円でやれ」と言われたら、それでやる他なかった。

だから私も九谷焼技術研修所では「強くなりなさい」とよく言っています。

自分で値段をつけられるようにならないとダメだよと。

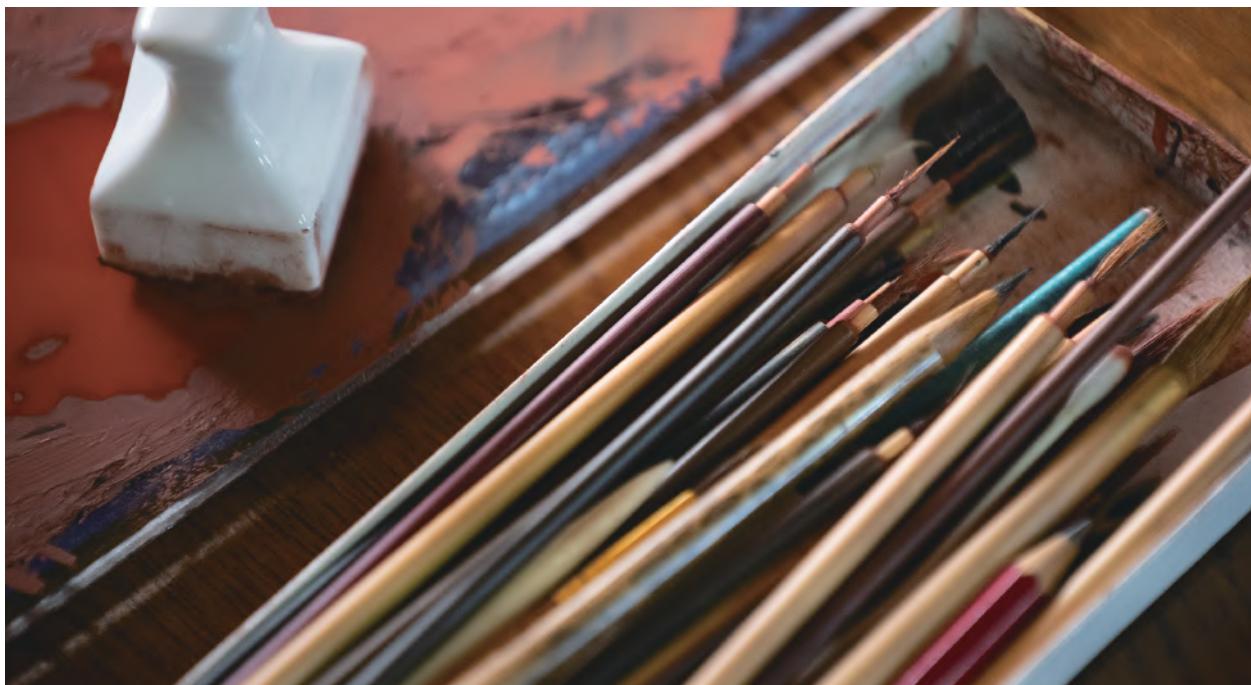


数学的な赤絵細描の世界

秋元：福島さんは、これまで赤絵以外をやってみたいと思ったことはなかったんですか？

福島：あまり考えたことはないですね。最初少しだけ古九谷風のものを描いたこともありましたけど。**よそ見**しなかったというか、できなかつた、というのが良かったのかなと思っています。
今の見附くん（※）が全く同じ状況になってますね。むしろ僕よりも脇目を振らず、赤い線ばっかり描いています。

（※）見附正康さん…赤絵細描技法で注目される若手九谷焼作家。福島武山さんのもとで10年間修行していた。



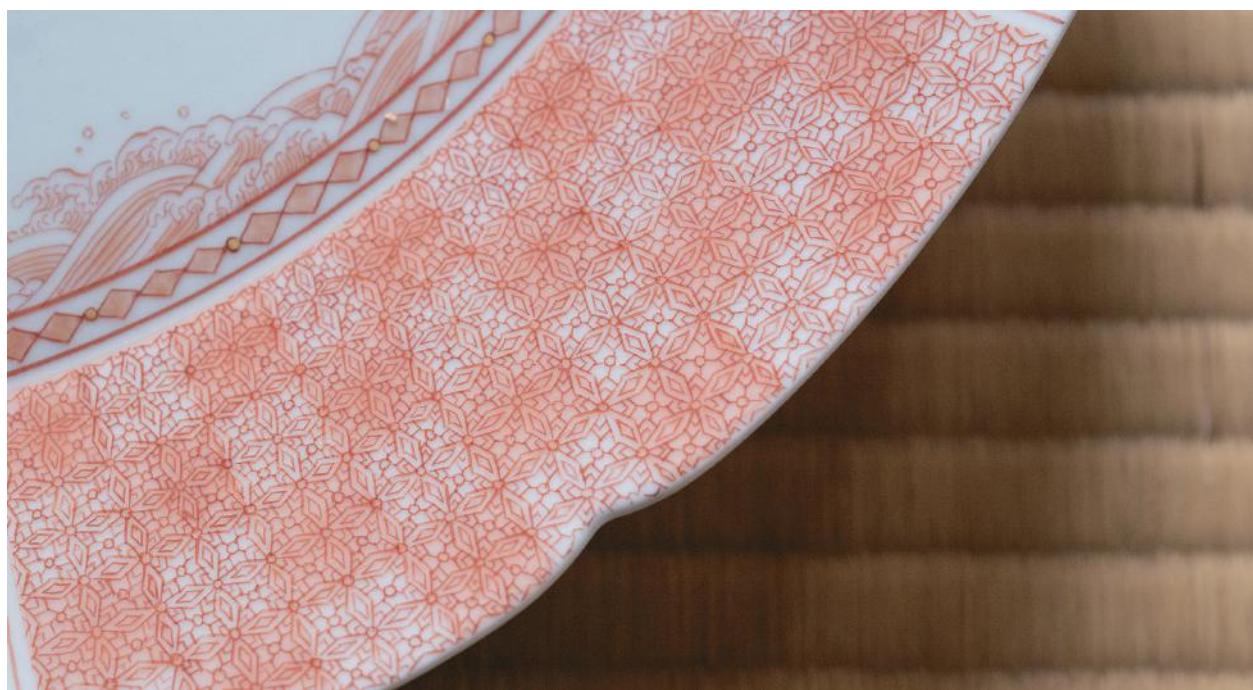
細描に用いられる、細い筆。「新品より、使い込まれたものの方が良い」と福島さん、お弟子さんから使用済の筆をもらうこともあるとか。

秋元：やっぱり根気がある人じゃないと続かない特殊な世界なんですね。

福島：ちなみに、鬱など心の病を持っている人にも赤絵は凄く良いんですよ。黙って小紋を描いていると集中できますし、ひとつずつ確実に埋まっていく。少しづつ元気になってきて、ご両親も喜んでおられます。私自身、疲れているときに模様を描いていると、なぜか楽になってくるんですよ。

秋元：ああ、その感覚は少しわかるような気がします。ちなみに、赤絵の技術的な難しさというのはどこにあるんでしょう？

福島：やはり「色むらを出さない」ということではないでしょうか。濃淡がでてしまうと良くない。



びっしりと書き込まれた線。線の細さが均一でないと、不要な濃淡がでてしまう。

秋元：なるほど、線に濃淡が出ると、画面が荒れてしまいますもんね。模様には何かパターンのようなものが

あるのですか?

福島:基本となる模様はあるので、あとはその“展開”的仕方ですね。

幾何学模様はある意味もう出尽くしてしまった感はあります。研修所の学生さんにも「夜ご飯食べた後にでも白い紙に模様書いて、それを展開してみなさい」とよく言っています。

秋元:絵付けの際に、あらかじめ下絵のようなものはつけるんですか?

福島:窯に入る前の器には黒い線がいっぱい描かれていますよ。

方眼目を描いたり、割付にはコンパスをつかったりもします。割付には数学の計算が必要なので、これが苦手という若い子はいますね。だんだん展開していくようなものを考えるのは結構難しいんですよ。

秋元:なんというか、情緒的な判断が入る隙がないというか、きっちり計画的にやっていく感じなんですね。

福島:そうですね。“個性”のようなものは比較的出にくい分野なのかもしれません。



「作家」ではなく、九谷焼の「組合員」。

秋元:福島さんのお人柄もあって、若いお弟子さんが次々とやって来られていますよね。

見附さんなど、今第一線で活躍している作家も輩出しておられます。どんな風に見ておられますか。

福島:彼らは九谷焼にとってもう救世主ですよね。「九谷焼」の名前をどんどん広めていってくれている。

そうやって若い人が活躍してくれているので、他産地から「九谷は元気だ」と言われますよ。

実際は一部が突出しているだけで、そんなに元気があるわけではないんですけどね(笑)。

秋元:ある種“福島一門”的な形で、面倒をみてこられたと思うのですが、その辺りは何かお考えがあつての事なのでしょうか。

福島:「福島武山一門」として展覧会を開催すると、若い子の作品がよく売れるんですよ。例えば私の器が10万円なら、彼らの器は2万円ほどで、さらには綺麗に描けているので売れますよね。この仕事は言ってみれば“特殊な仕事”ですから、サラリーマンほど稼げるようになるのは中々大変です。だからこそ、なんとか少し

でも、彼らの生活を良くしてあげられたらという想いはあります。



秋元：なるほど。ある種一門としてお名前を貸されている部分もあるわけですね。

でも福島さんも個人の作家として、自身の制作活動だけに集中して一人で走り抜けた方が早いという考え方もできますが。

福島：いや、私は“作家”ではないので。26歳で「佐野上絵協同組合」に入れてもらったと同時に“組合員”ですから。

あの徳田八十吉先生でさえも、ご自身のことは“職人”だとおしゃっていましたよ。

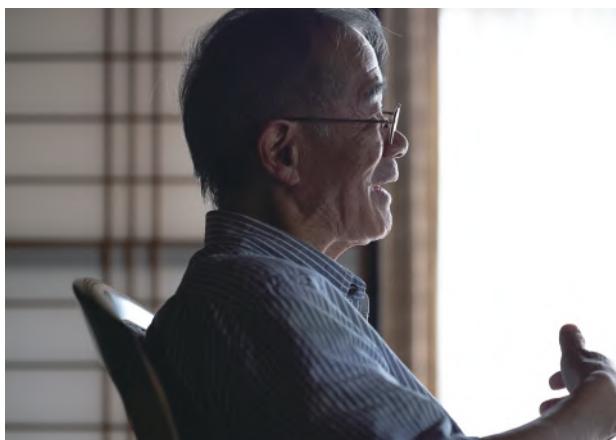
先生の作品はもう“アート”ですけどね。そういう意味でも僕の仕事はどう見たって職人仕事ですよ。

秋元：ちなみに、福島さんのおっしゃる「職人」って、どういうイメージなんでしょう。

福島：どうでしょう、難しいですね。ただ、やはり“一点物”をつくるアーティストとは違いますよね。

徳田先生にしても、記念品や贈答品など量産品もつくられましたし。私も同じです。

秋元：展覧会にも次々と出されて、こんなにもご活躍されていますが。





福島:展覧会に通つたら「先生」と呼ばれている方もおられるけど、そういうことではないですよね。やっぱり広い意味で、九谷産地全体で底上げして、良くなっていかなくては。

一つ、私の自慢話がありましてね。

バブルが弾ける前、ものすごく九谷焼産業が忙しかった時期に、他から参入されてきた女性達がたくさんいたんです。

その人たちの仕事といえば、ただ器に印判を押していくだけで、技術力も何もなかった。そこにバブルが弾けてしまって、一番最初に職を失ったのも彼女達でした。

そこに危機感を感じて、ちょうどその時私が伝統工芸会会長をしていたので、会員の協力を得て平成21年に「技術復活講習会」というものを企画したんです。2年間で、講義4回、技術研修を50回程実施しまして。のべ800人が習いにきて技術を身につけ、最終的には東武デパートや阪急などにも作品を出せるまでに成長した方もいます。

秋元:なるほど、技術さえあれば、どんな時代でも食べていいけど。福島さんは常に「若い子が育つ」、そして「ゆとりをもって食べていける」ということを非常に大事にされていますよね。それが赤絵の世界、ひいては九谷焼のために重要であると。

福島:そうですね。この土地に来たからには、何かお返しえきたらという気持ちです。

秋元:それにしても、ある程度予測はしていたとはいえ、ここまできっぱり「自分は作家ではない」とおっしゃるとは(笑)。今日は大変興味深いお話を、どうもありがとうございました。



KUTANism

主催:KUTANism実行委員会 共催:能美市、小松市 協力:石川県九谷窯元工業協同組合、石川県陶磁器商工業協同組合、九谷上絵協同組合、九谷焼団地協同組合、公立小松大学、こまつKUTANI未来のカタチ、小松九谷工業協同組合 後援:北國新聞社、認定NPO法人趣都金澤

クタニズム実行委員会事務局
〒923-1198 石川県能美市寺井町た35 (能美市役所 産業交流部 観光交流課内) MAIL:info@kutanism.com



クタニズム <https://kutanism.com>